

青木省三，村上伸治，鷺田健二 編

大人のトラウマを診るということ

こころの病の背景にある傷みに気づく

小林桜児

「トラウマ」という用語は、ある種のリトマス試験紙である。精神科や臨床心理に従事している者は、その用語に対する反応によって2種類に大別される。精神症状を遺伝負因や神経伝達物質の異常から説明することを好む臨床家は、トラウマと聞くと「あまり触ってはならないパンドラの箱」といった苦手意識を感じるか、あるいは「自己責任を取らずに何でも周囲の人や環境のせいにするための口実」などといった嫌悪感を隠し切れないかもしれない。他方、精神分析や力動的精神医学の影響を受けた臨床家は「トラウマ」を幅広く解釈し、診断や治療上不可欠な要素、と主張するであろう。

かくもトラウマという用語は、人間に対極的な反応を引き起こす。女性の性的トラウマから研究を始めたはずのFreud自身、やがてトラウマ体験は本人の空想、と解釈するに至った。第一次世界大戦中に戦争神経症を発症した兵士たちは臆病者とみなされ、イギリスの精神科医Lewis Yeallandは電気ショックで治療しようとした。トラウマ体験が心の病を引き起こすことを私たちが認めることが難しい理由の一つは、それを認めてしまうと、患者は「炭鉱のカナリア」に過ぎず、患者を取り巻く他者が、社会が、つまりはその社会に属する私たち一人ひとりが変わらなければならない、という現実と向き合うことになってしまうからではないだろうか。

本書はトラウマに関する疾病教育的な解説から始まり、その後は多彩で豊富な症例が次々と提示されて、症状の背後に隠れたトラウマ体験への気づきを読者に促していく。私たちは気付かなければ、変

ることができない。狭義のPTSDにとどまらず、知的障害から統合失調症、そして認知症に至るまで、トラウマ体験が精神障害全般に与える影響について、専門家でなくともわかりやすい言葉で解説されている。語り口は優しく謙虚で、病状の理解の仕方も極端に心因に寄り過ぎることなく、非常にバランスが取れている。さらに患者を取り巻く家族や援助者たちへの目配りも忘れず、豊富な経験に裏付けされた助言も随所にちりばめられている。トラウマという用語に苦手意識や懐疑心を抱えている一般の方々や第一線の臨床家に、特に本書をお勧めしたい。

2012年にはハーバード大児童発達センターのShonkoffらが³ toxic stressの概念を発表し、生育環境におけるトラウマが子どもの発達に与える影響について、一段と注目が集まっている。さらに近年エビジェネティクスの研究が進んで遺伝子の発現が環境因子によって変わり得ることも次々と明らかになり、もはやnatureとnurtureは対立用語ではなくなった。今後はトラウマが精神症状を生み出す神経生物学的機序も、より精緻に語られるようになっていくであろう。そのような時代の分水嶺に、トラウマという視点の大切さを教えてくれる本書が上梓されたことを素直に喜びたい。

(神奈川県立精神医療センター副院長/医療局長)

● A5・頁224 2021年
定価：本体3,000円＋税
医学書院刊